

SIR2004 印象記

森本賢吾

奈良県立医科大学 放射線科

IVR 学会国際トラベルフェローの支援を受け、2004年3月25～30日に、米国アリゾナ州フェニックスで開催され

た2004・SIRに参加させて頂きました。

最も興味をもったのは、プレリミナリーセッションの中のThe World of intervention : IR in Oncologyでした。HCCがアメリカで増加していることもあり、HCCに対するRFAとTAE (TACE) が話題の中心でした。

Transarterial Therapies in the US という Jeff H. Geschwind, MD の講演では TAE に関する RCT についても触れ、よくデザインされた TACE では生存率が改善するということを主張されていました。また、The Korean Approach to HCC では Jae-Hyung Park が TAE を中心とした講演をされました。Segmental and Subsegmental TACE (我々の施設では Seg Lp-TAE, Subseg Lp-TAE と呼んでおり、当科の文献も参考文献として出されていました。)についても講演され、超選択的な TAE のスライドも

提示されていました。これらを聞いていると世界的にも今後TAEはさらに注目され、発展していく治療であると感じました。しかし、HCCに対する治療が確立されている途中なのか、門脈腫瘍栓やTAE無効多発例に対してどう治療戦略を立てていくかという話は取り上げられていませんでした。RFAはヨーロッパの先生方が中心に講演していました。また、疼痛緩和のIVRが取り上げられており、なかでも椎体形成術が注目されていました。

その他は、ワークショップを中心に参加し、それぞれの分野で基礎的な知識の勉強ができました。ワークショップのみの別冊が約500ページにもわたっており、その充実した内容に驚きました。またCDも別売されており、IVRの教育にSIRが非常に熱心なのだと感じました。また、椎体形成術を学会でも広めようと考えているものと思われ、実際の透視下にシミュレーターを使った実技の講習も行われていました。

機器展示では、血管造影のシミュレーターに驚きました。実際に患者さんのモデルに挿入されたシースよりカテーテルの後ろがでており、ここを操作すると、モニターでカテーテルがその

動きに併せて動いているようにみえます。また、カテーテルの先端の形状も画面上で選択できます。この機械をみて、実際には難しい血管解剖の症例においても、まずシミュレーターで経験しておいてから実際に臨床で施行するといったことが出来れば便利だと思いました。またRFAの電極針では、展開型の針(RITA等)で凝固径が大きくとれるものも展示されていました。TAE、バルーン閉塞による血流低下により凝固径を大きくする工夫がなされていますが、展開針が大きくなれば尚一層RFAの適応が広がることと考えます。また、ここでも、椎体形成術の注目は高く、各種デバイス、セメント等の薬品が多数展示されていました。

学会ではありましたが、人生ではじめてのアメリカでもありセドナに時間をみつけて行かせて頂きました。アメリカの壮大な自然が目の前に拡がりただ驚くばかりでした。

今回、吉川教授、山本先生は発表を持って学会に出られていましたが、日々精進し、2005.3.31～4.5にニューオリンズで開催される、次回のSIRには自分の発表をもって参加出来るように頑張ろうと決意を新たにしました。

